【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和6年度学校評価 計画

学校名

佐賀大学教育学部附属中学校

達成度(評価)

A:十分達成できている B:おおむね達成できている

C: やや不十分である **D**: 不十分である

前年度 評価結果の概要

- ・「学力の向上」について、研究3年目である「社会で生きて働く資質・能力の育成」や「質の高い深い学び」の実現に向けて、一定の成果は残せた。また、ICTの利活用については、教員によるICT機器を効果的に活用することができた。生徒は授業や実行委員会、学なってきており、自分の考えを表現することや情報を処理することに更なる向上を望んでいる。生徒たちの求めるより高い処理力・表現力の域に達するように、教員のICTを活用できる能力を高めるための研修等を行っていきたい。
- ・「健康・体つくり」について、健康増進や体力づくりなど意識は高いものの、中学3年生は受験期ということもあり、運動する習慣が少なかった。中学1,2年生も決して高い値ではないため、体育の授業や部活動の指導の中で、運動と体力の関係、健康との関係にご つなげたい。
- ・「業務改善・教職員の働き方改革の推進」について、コロナ禍のときには、縮小されていた学校行事が再開され、それぞれの活動時間が長くなったことが要員である。時間外の勤務時間については昨年に比べて減少しているが、教職員個人の意識としては業務改善の る。校務分掌や学校行事の見直しや業務の分担をしていき、教員の健康面・精神面の負担を減らすだけではなく、教育の質も確保していく必要がある。
- ・他は全体的に達成できており、成果が見られた。新研究に向けて研究を進めていくことはもちろん、令和8年度の部活動の停止に向けた取組や制服の見直し、学校行事の精選など引き続き継続して行っていく。

2 学校教育目標

本校の使命に応じて、高いレベルで自律し、共同することができる次世代リーダーを育成する

3 本年度の重点目標

- ① 未来をひらく共創する学び手の育成を目指す。
- ② 学校教育全体を通して、命や人権を大切にする指導を行い、生徒の心と人権感覚の育成を目指す。

4 重点取組内容・成果指標

5 最終評価

(1)共通評価項目

重点取組			E (+ 45 T- 40	最終評価		学校関係者評価	
評価項目	取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言
	◎様々な学びの場面で、生徒自ら目標を設定し、行動し、振り返るAARサイクルを回す手立てをとることによる、エージェンシーの育成。	○指導計画に基づき、授業実践を行うとともに、適切な評価により得られた結果などを次期計画の修正に生かす教員85% ○学校での学習が、学習意欲の向上、学ぶ意味や価値の充実に繋がっていると考える生徒85% ○課題に対して、目標を設定して取り組み、自らの取り組みについて振り返ることができている生徒80%	・単元や題材を通して、生徒自身が見通しをもち、取り組み、振り返ることができる学習過程の検討及び実践 ・課題設定や話し合いの場の機能、振り返り、評	A	・指導計画に基づき、授業実践を行うとともに、適切な評価問題により得られた結果などを次期計画の修正に生かすことができていると答えた職員は95%であった。・学校での学習が、学習意欲の向上、学ぶ意味や価値の充実に繋がっていると肯定的に考える生徒が92%で、保護者は85%であった。・学校での学習は、課題に対して目標を設定して取り組み、その取組を振り返ることで、自分自身を成長させていると捉えている生徒が93%であった。・どの項目においても目標値を超えているためA評価とする。・学校での学習が学ぶ意味や価値を充実につながっていないと感じる保護者が14%を占めていることを受け、授業改善を行っていくとともに、学校での学びを発信していくことを検討したい。	Δ	・アンケートの結果によると、指導計画実践についての職員の達成度は95%、学習意欲等に関して生徒の達成度は92%、保護者は85%、学校での学習に対しての達成度は生徒が93%といずれも目標値を超えており、生徒や保護者からも高い評価をうけていることがわかる。・当該学校が掲げる協働的な学び、探究的な学びが実践されていることがこれらの結果から推察される。来年度以降も継続して課題解決に向けた取組を進めていただきたい。
●学力の向上	◎ICT利活用を通じて、個に応じた指導方法、学習時間、教材等を豊かで柔軟に提供する。	を活用した授業で、個に応じた指導を実践できる 教員90% OICT機器を活用した学習において、考える力が 高まったと感じる生徒90%	・生徒用パソコンでの教材の提示を工夫し、個に	В	・各教科等の授業において、計画的にICT機器を活用した 教員は95%を超えたが、個に応じた指導を実践できた教員 は77%に留まった。 ・ICT機器を活用することで『情報の処理や表現』について 高まったと肯定的な回答をした生徒が93.5%であった。また、『個に応じた学習』が行えたと肯定的な回答をした生徒が92.2%であった。反面、ICT機器を活用することで『考える 力の向上』を感じた生徒は87.8%に留まった。 ・生徒は授業や探究活動、委員会活動などで、ICT機器を 利用する機会が多く、高い処理力・表現力を身に付け、自 分の理解度に応じた学習に取り組めていると考えられる。 反面、他の生徒と考えを共有したり、考えを深めたりする場 面では、直接的な対話や模造紙・ホワイトボードを活用する 姿が多く見られたことから端末を活用して高まったとは感じ ていないと考える。 ・今後は、端末の特性をいかした情報共有の場面設定や生 成AIを活用して考えを深める場面を模索し、さらにICT利活 用の充実を図っていきたい。また、生徒たちの求める高い 処理力・表現力の域に達するように、教員のICT活用能力 を高めるための研修等も行っていきたい。		・ICT機器を計画的に活用できたという教員は95%以上であり、生徒においてもICT活用について肯定的な印象をもっていたことは高く評価できる。 ・ICTを学習活動に活用することの利点のひとつは個々の進捗状況に応じた対応がなされるということだと考えられるので、個に応じた指導を実践できたという教員の割合が十分とはいえないところは、今後の課題としていただきたい。

	●生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への 思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する 心など、豊かな心を身に付ける教育活動	〇道徳に関するアンケートにおいて肯定的な回答をした生徒85%以上	・各教科の授業で、お互いが認め合えるような場の設定 ・学年職員のローテーションにより、組織的かつ計画的な道徳教育の実施 ・人権週間において、命や人権について考える機会を設置 ・夏季に人権・同和教育に関する職員研修を実施	A	・道徳に関するアンケートにおいて、肯定的な回答をした生徒が94%、保護者が89%であったため、十分達成できたと考える。 ・次年度も豊かな心を育成していくために、互いを認め合う場や、命や人権について考える機会を設定していきたい。	A	・生徒の倫理観を高め、社会の中のひとりとして生ていく態度をこの時期に身につけることは非常に重要である。アンケート結果が高い達成度を示してしてとは評価できる。今後も生徒にさまざまな知識や験を提供し、人権に対する高い意識や豊かな心を成していってもらいたい。
●心の教育	●いじめの早期発見、早期対応体制の充実	〇いじめの防止など(いじめの定義、いじめの防止等のための取組、事案対応等)について組織的に対応ができていると回答した教員、生徒ともに85%以上		A	・いじめの防止に関するアンケートにおいて、肯定的な回答をしている生徒が90%を超えており、かつ教員は100%であったため、十分達成できたと考えられる。次年度も継続して生徒とともに、安心して過ごせる環境をつくっていく。また、そのためにも心のノートや心の扉、いじめ実態調査などを活用し、日々の生徒の実態把握に努めるとともに、生徒主体学活等で人権に関する授業を展開していく。	A	・アンケート結果では生徒、教員ともにいじめ防止対して肯定的な回答を得られており、高く評価でる。ただいじめの報告は毎年数件発生しているため、いじめ事案が皆無になることを目指して、取りんでいくことを期待する。
	○エージェンシーを発揮する場としての生徒会 活動の充実	○「自分たちの手で学校を創っている」について 肯定的に回答した生徒80%以上	・生徒会活動について説明する対面式の設定 ・年2回の生徒総会を開催、自治の意識の醸成 ・生徒と教師が共にAARサイクルを回すことによ る共創の姿勢の重視	A	:・「生徒会の様々な活動を通して、自分たちの手で学校を 創っているという実感をもつことができましたか。」という質 問に対して、肯定的な回答をした生徒は87.8%と、前回を 上回る数値となった。保護者へのアンケートでも「本校の生 徒会活動や学校行事をご覧になって、生徒たちが、自分た ちの手で学校を創っていこうという姿が見られましたか」と いう質問に対して、肯定的な回答が97.3%と非常に高かっ た。よって、十分に達成できたと判断できる。	A	・附属中は以前から生徒会活動は盛んであった。アンケート結果によると、さらに自主的な学校活動の意欲が向上しているということから、生徒の主な活動がなされていることをうかがい知ることがでた。 ・保護者からも生徒会活動に対して非常に高い意を得られており、今後も生徒の自主的な活動を見守っていくことが大事だと思われる。
●健康・体つくり	●運動習慣の改善や定着化	○健康・体つくりに運動習慣は大切と考える生徒 80%以上 ○授業以外で運動やスポーツを行う時間の合計 が、1週間で90分以上の生徒80%以上	・運動時間や週当たりの運動頻度の実態調査	В	・健康や体力向上に運動が大切と考える生徒は78.2%であった。 ・授業以外で運動を行う時間の合計が週当たり60分以上の生徒は51.8%であった。 ・学級指導や部活動指導の中で、生活の中に運動習慣を取り入れることの大切を指導することができた教員は78%であった。 ・子供の健康や体力づくりを意識して改善に取り組む保護者は70%であった。 以上のことから、健康増進や体力づくりの意識は高いものの、運動習慣へ結びついている生徒が少ないことがわかった。要因としては中3が受験期ということが影響したと考えられる(中3のみ29%)。運動習慣が定着化できるような体育的行事を生徒会や保護者、地域と連携をして積極的に取り組んでいきたい。	В	・身体的に急激に成長していく中学の時期におい 運動によって筋力や体力を向上させることは重要 あり、生徒自らが運動の必要性を理解し、実践し とする態度を身につけることが求められる。 ・アンケート結果において、運動の必要性を理解 生活習慣を改善しようとする生徒や保護者が一う みられるものの、さらに取組を強化する必要があ 考えられる。
	●基本的生活習慣の意識化と定着	〇県が実施する「健康に関する意識調査」で、「健康において運動、食事、睡眠は大切」と考える生徒90%以上	・保健室来室時において、生徒自身が生活リズムを見直すなど個別指導の実施・長期休業前の保健指導や、学年育友会を通じて家庭への啓発・生徒会健康づくり部と連動した啓発活動	A	・県が実施した「健康に関する意識調査」では、98%の生徒が「健康において運動、食事、睡眠は大切」と回答し、県平均とほぼ同程度であった。中でも、中3においては、食事や睡眠を中心とした基本的な生活習慣の実践ができている生徒が全体で90.3%と、他学年より高くなっており、受験期の過ごし方について、保護者のサポートや教職員の声掛けが健康管理の大切さを見直すきっかけになったと考える。一方で、中1においては、実践できていないと答えた生徒が12.8%いると同時に、13.7%の保護者が健康管理のサポートに積極的でないことが分かった。意識と実生活の乖離の要因を探っていく必要がある。	A	・アンケートによると、ほぼすべての生徒が運動事、睡眠の重要性を理解しているという結果であた。しかし、中1においてはそれらに関する生活者が十分でないという生徒が一定数存在し、または者についても理解が不足しているということであた。 ・生徒とともに、保護者に対しても、正しい生活習を子どもが身につけるように、学校の方から積極に働きかけていくことが必要であると思われる。
●業務改善・教職員の働き 方改革の推進		〇時間外勤務を削減できるよう努力した職員 80%以上。昨年度の時間外勤務の平均時間を 下回る。	・退勤時間の掲示、アナウンス ・業務内容精選、見直しのための会議設定 ・勤務間インターバルを導入し、退勤から次の出 勤までの休息時間を11時間以上を確保する。 ・R8に向けた課外活動のプレを実施 ・アンケートをデジタル化する	A	・勤務間インターバルの実施状況を把握するために、退勤から次の出勤までの休息時間を11時間以上取ることができたかという質問に対し、全職員が「よくあてはまる」「あてはまる」に回答した。業務内容を精選・見直しのために積極的にアイデアや意見を出すことができたかという質問に対し、肯定的に回答した職員が73%であった。保護者アンケートでも85%の保護者の方が肯定的に回答して頂いた。・全職員が勤務時間を守っている状況は評価できるが、業務内容の精選・見直しに対する職員の意識に差が見られた。会議での発言や提案を取り入れ、全職員で業務内容について検討していきたい。また、質の高い教育は確保しつつ、業務改善を進める一方、令和8年度の部活動の廃止に向けて、新たな放課後活動の提案や大学との連携など課外活動の充実を全職員で検討して準備を進めたい。	A	・働き方改革が求められる中で、退勤から出勤さの休息時間が十分に取れているとアンケートにて、全職員が当てはまるという回答をしているとことであり、改革が進んでいると評価できる。・働き方改革の一環として、令和8年度から部活完全廃止を掲げており、それにむけて現行の部保護者に向けての説明会等を頻繁におこなってる。部活動についても社会体育へスムーズに移し、教員の業務の軽減をさらに進めていくことがである。

	重点取組				最終評価		学校関係者評価	
評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言	
〇教育実習	○実習生の指導技術の向上や達成感を保障する実習指導の充実 ○大学との連携	○教育実習後のアンケートで達成感・充実感があると回答をした実習生80%以上 ○教育実習中の大学教員による視察・指導の達成80%以上	・指導教員による魅力的な教職モデルの垂範・実習日誌等を通した、実習生の達成感や成長の様子の確認及び指導・助言・大学教員との情報共有	A	・アンケートで達成感・充実感が「とてもある」と回答した実習生は80.0%、「ある」と回答した実習生をあわせると100%となり、十分達成できている。 ・教育実習中の大学教員による視察・指導(主免教育実習)は目標は達成したものの、昨年度実績から数ポイント下がった。理由として、大学の担当者のスケジュール調整が難しかったことが考えられる。80%を目標に掲げているが、100%を目指して、今後も粘り強く実習校への訪問をお願いしていく。		・学生にとって教育実習は不安も多く、また精神的 肉体的に大きな負荷を感じながら取り組んでいる が、すべての実習生が達成感、充実感を感じてい ということであり、実り多い実習が実践されている。 がうかがえる。附属の先生方のご指導、ご協力に、 るものであり、感謝申し上げたい。 ・実習中の大学教員の視察・指導の実績がやや減 少しているとのことであるが、これは大学側の問題 あり、大学教員においては、担当学生を責任をもって指導していくよう周知徹底させていくことが強く求 られる。	
○研究	○エージェンシーを育成するための工夫 ○AARサイクルを取り入れた学習過程の実践 ○生徒が主体となる活動の場の設定	〇授業の中で見通しをもったり、個またはグループで課題に対して吟味したり、学習内容や学び方を振り返ったりする時間が確保されていると思う生徒85% 〇授業や諸活動を通して、エージェンシーを高めることができた生徒80% 〇これからの社会で生きていくために必要となる力を授業や諸活動を通して高めることができた生徒75%以上〇授業の中で、生徒が見通しをもって課題に取り組んだり、学び方を振り返らせることで、エージェンシーを育成することができた教師85% 〇教科の本質を追求する研究を推進した教師90%以上	キュラムの編成 ・AARサイクルを回すための手立ての追究 ・B-Timeの再検討 ・生徒が主体となる活動のあり方の追究	A	・授業の中で、生徒が見通しをもって課題に取り組んだり、学び方を振り返らせることで、エージェンシーを育成することができたと捉えている教師は100%であった。・教科の本質や指導法改善に追究する研究にとりくめた教師は100%であった。・これからの社会で必要になる力を高められる活動が設定されていると感じている生徒は92%で、保護者は95%あった。・授業の中で、見通しをもち、個人やグループで課題を吟味したり、学習内容や学び方を振り返ったりする時間が設定されていると捉えている生徒、展護者ともに96%であった。・どの項目も目標値を超えているためA評価とする。・教科等の学びの中で、AARサイクルを回す活動が設定されていることが、生徒や保護者の中に定着してきていて、その活動がこれからの社会で必要になる力の育成につながっていると感じていることがわかる。・研究の方向性を全職員が共有するとともに、引き続き生徒や保護者に発信することで、学校と家庭で共に研究を進めていきたい。	A	・附属学校の存在意義として、それぞれの教員が研究を進め、地域の教育力の向上に寄与することがめられているが、アンケートの結果、すべての教員が指導法改善の研究に取り組むことができたと回りしており、附属の教員として高く評価すべき人材でると考えられる。 ・また教員の研究成果が生徒の学習活動にも活かれていると生徒や保護者にも理解されていることがアンケートから読み取ることができる。今後も研究活動を進めていき、その成果を広く発信することによって、地域の教育に寄与していってほい。	

●・・・・県共通 ○・・・学校独自 ◎・・・志を高める教育

総合評価・次年度への展望

・「学力の向上」について、研究1年目である「未来をひらく 共創する学び手の育成〜エージェンシーを育む方策を通して〜」の実現に向けて、研究推進部を中心に全職員への理解を進め、各教科で協働的な学びや探究的な学びを実践した。その中でAARサイクルをまわす活動を設定し、エージェンシーを育むことができるような手立てを取った。また、研究主任による全校集会での説明や研究通信の発行等を通して、生徒・保護者への周知・理解を進めた。それにより、教員と生徒・保護者とが共通の認識をもつことができた。ICTの利活用に関しては、肯定的な回答をした生徒・保護者は多かったものの、ICTの活用が「考える力」の向上につながったことを実感するという結果には至らなかった。ICTの活用方法については今後検討していく余地がある。

- ・「業務改善・教職員の働き方改革の推進」について、昨年度はB評価ではあったが、今年度は勤務時間の削減に取り組むことができた。今後は、部活動廃止に向けて、社会体育への移行を進めるとともに、魅力ある学校づくりを目指し、引き続き大学と連携しながら、全職員で業務内容を検討していく必要がある。
- ・「健康・体つくり」について、健康増進や体力づくりなど意識は高いものの、中学3年生は受験期ということもあり、運動する習慣が少なかった様子である。中学1・2年生も決して高い値ではないため、体育の授業や部活動の指導の中で、運動と体力の関係、健康との関係について理解を促し、習慣化へとつなげたい。
- ・全体的に概ね達成できており、成果が見られる。研究についても2年目になるため、生徒と共に学校規定の見直しや実行委員会の取組など検討し、生徒達のエージェンシーを発揮する場面を設定していきたい。